



## 馬耳東風

はるか昔のことになるが、小学校の国語の教科書に載っていた話でいまだに思い出すものが二つある。一つは「最後の授業」、もう一つは「デンマークの二本の柱」である。

「最後の授業」は、アルフォンス・ドーデ（仏、1840-1897）の小品で、敗戦（普仏戦争1870-71）によりそれまでフランス領であったアルザス地方がプロシア領となったことにより、授業でフランス語を教えられなくなった時の、フランス語の最後の授業を題材にしている。この話の最後に、先生が黒板に大きく「フランス万歳」と書いたという部分がいまだに記憶に残っているのである。当時は戦後間もない時期であったので、「日本は戦争に負けたが国語は日本語のままで良かった」と先生に言われ、「なるほどその通りだ」と共感して最後のシーンが印象に残ったのかも知れない。この作品は戦後に教科書に採択されたのではなく、戦前からあったそうであるが、敗戦の爪あとが残っている時代に育った小学生には、身にしみる話であった。

「デンマークの二本の柱」は、1864年プロシアやオーストリアと戦って敗れ、肥沃なユトランド半島基部のシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン地方を失ったデンマークにおいて、疲弊した国土を植林により復興させた男の話であった。男の名は、エンリコ・ミリウス・ダルガス。小学生の私は朗読させられるのに備えて何度も舌を噛みそうになりながら練習したものであった。ダルガスは、農民たちを指導して、残された国土の約1/5を占めるヒースに覆われた不毛の地を灌漑し、ジャガイモや牧草を植えるよう指導し効果を挙げた。しかし、彼がデンマーク復興の父といわれる所以は植林にある。植林

によりやせた土地から木材生産が可能になったばかりでなく、広大な林は北海からの砂嵐を防ぎ、夏には昼間はきわめて暑く、夜間には霜が降りることもあるような気候を温暖化し、ジャガイモや黒麦以外にも小麦や砂糖大根等、北欧で生育できる農産物すべての生産を可能にしたのである。植林は失敗の連続であったが粘り強く取り組み、ノールウェー産の大モミの間に、アルプス産の小モミの木を植え、さらに大モミがある程度成長した段階で小モミを切り払うことにより初めて建材として用いる木材生産を可能とした。これは息子フレデリック・ダルガスとの父子2代にわたる取り組みであった。この物語は、1911年、内村鑑三が行った講演を内村自身が文章化して翌年『聖書之研究』に掲載したものが元になっており、現在は「デンマルク国の話」として文庫化されている。調べてみると内村の講演内容は数名の人たちによって翻案されており、教科書には内村のオリジナルを含め、1951年から1961年までの間に27の教科書（小5～中3）に取り上げられている。私が習ったのは、高橋健二氏の翻案になるものであった。

敗戦直後の国語教科書編纂者や文部官僚たちは、わが国と同様の敗戦国であったデンマークが、いかにして敗戦の痛手から立ち直り、発展したかを子供たちに教えることにより、われわれもまた頑張って復興しようと教えたかったのであろう。そしてその目論見は成功したといえるだろう。老人になった今でもその物語を記憶している人間がいるのだから。あらためて教科書やそれに沿って教える先生方が、未熟な小中学生のもの見方や考え方に果たす役割の大きさに気づかされる。歴史の曲がり角に差し掛かっている現在、教科書編纂に携わる方々には、時の政権に右顧左眄することのないよう強くお願いしたい。（久）